朝日新聞　2022年（令和4年）8月2日（火）

生きるとは 伝える親心

20年前 娘を飲酒運転の車が奪った

20年あまり前、飲酒運転の車に最愛の娘を奪われた両親が、命の尊さや当たり前の日常の素晴らしさを伝える取り組みを続けている。全国各地で開いた講演や、遺品の展示はあわせて400回を超えた。ともに70歳を過ぎても続けるのには、娘を失って気づかされたことを伝えたいとの思いがあるからだ。

高校生を前に講演する江角弘道さん

娘の真理子さんの写真を貼ったパネルを見つめる母の江角由利子さん＝出雲市今市町

講演続ける江角さん

出雲市の住職、江角弘道さん（77）は4月下旬、県立出雲高校（同市）で2年生と教職員約300人を前に、ゆっくりと「あの日」のことを語り始めた。

1999年12月25日、江角さんの次女・真理子さんはクリスマスのイルミネーションを見物するため、友人3人と車で岡山県へと出かけた。

その帰り道だった翌26日未明、鳥取県智頭町を走る国道53号のトンネルで飲酒運転の車が対向車線にはみ出し、真理子さんらが乗った車と正面衝突。真理子さんを含む3人が亡くなり、1人が重傷を負った。

4人は鳥取大学の3年生。真理子さんは20歳だった。大学では英語を専攻し、アルバイトでためたお金で10カ国を訪問。帰国すると楽しそうに旅の思い出話をしてくれた。卒業後は、ツアーコンダクターなど海外を舞台に活躍できる仕事に就くのが夢だったという。

「真理子は20歳のまま時が止まっている。生きていたら、今どんなふうになっていたのかな。結婚して、子どもができていたかもしれない。そう思うと、本当に悔しい」。江角さんはスクリーンに映る娘の写真を見つめながら、今も変わらない苦しい胸の内を語った。

被害者にも加害者にもならないで

江角さんが真理子さんの死について自身の経験や思いを初めて話したのは、事故から3年が経った2002年。松江市内の高校から依頼され、高校生を前に講演した。「自分たちのような思いを、もう誰にもさせたくない。誰一人として被害者にも加害者にもならないでほしいと思ったから」。自身が、娘の死と向き合うためでもあった。

それからは、妻の由利子さん（74）とともに、県内外で命の大切さを伝えるために講演をしたり、事件や事故で命を奪われた被害者の写真や遺品を展示する「生命のメッセージ展」を開催したりしてきた。

亡くなった当時の真理子さんの身長と同じ158センチの人形パネルに、成人式で撮った一枚を貼ってメッセージを添え、帽子と靴も並べる。「娘の生きた証しを見てもらうことで、生きることや命の重さを少しでも理解してもらえたら」。時にはウェディングドレスを展示することも。真理子さんに着てもらいたかったという由利子さんの親心だ。

講演で、江角さんが必ず話すことがある。それは、生きているのは当たり前ではないということ。娘を失って、初めて気づかされたことだ。がんで早世した医師が生前につくった詩を引用しながら、聞く人に語りかける。そして、自分自身にも。

「家族がいて、ご飯が食べられる。笑えるし泣ける、走り回れる。空気をいっぱい吸える。これは素晴らしいことで、生きているのは奇跡的なことなんです。『当たり前』ではなく、『ありがたい』『おかげさま』と思って生きてください」

（野田佑介）